



# 恋人や家族への 思いを詠う万葉の島

## 海の安全を祈った 神功皇后伝説

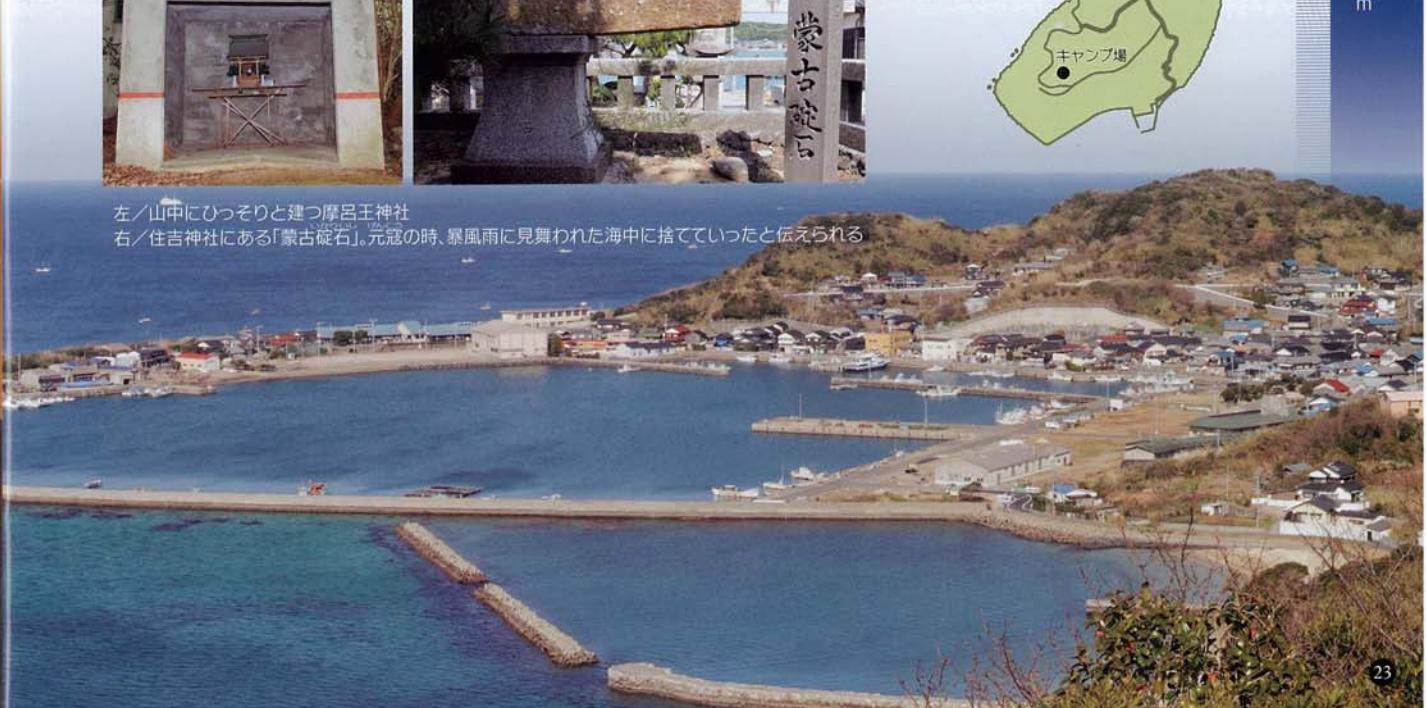
定期船で約8分、唐津市湊から600メートルほど沖合いに浮かぶ神集島に到着します。

神集島は船泊まりには都合のよい自然の入り江があったことから、古代、大陸へ向かうための日本最後の停泊地として利用され寄港地として重要な場所でした。

西暦200年代前半活躍した第14代仲哀天皇の妻・神功皇后も、天皇の名代で新羅へ出兵するためにこの島を訪れました。奈良を向いて建つ摩呂王神社には応神天皇のへその緒がまつられていると言います。



左／山中にひっそりと建つ摩呂王神社  
右／住吉神社にある「蒙古碇石」。元寇の時、暴風雨に見舞われた海中に捨てていったと伝えられる



評議岩で軍事会議を行い、土気を高めるためそこから弓を放ったことから弓張岳というなど、島にはロマン溢れる伝説が数々残っています。

島の名は神功皇后が神々を集めて海の安全を祈願したことからいたと言われていますが、現在は、神功皇后になりかわって海中に鳥居が立つ姿が印象的な住吉神社の氏神様が、航海の安全を祈っています。

2009年6月に開催された万葉ウォークで島に訪れた人々



## 万葉の7歌碑を巡る 「万葉ウォーク」

736(天平8)年、大和朝廷の使節団が新羅を訪れるときにも、風待ちのため神集島に船宿りしました。長く故郷を離れた使節が家族を想い、故郷を懐かしみ、島で詠んだとされる7首が日本最古の歌集「万葉集」に収められています。

「  
帰りきて 見むと思いし  
我が宿の 秋萩すすき 散り  
にけむかも」——六月に故郷を出発した使節は十月ごろには帰るつもりだったのでしょう。この歌には「秋になり家族は心配

その歌の内容に添った場所に1994年歌碑が建ち、毎年、歌碑を巡る「万葉ウォーク」が開催されています。多くの万葉や歴史ファンが訪れ、約1300年前の歌い手の気持ちに思いを馳せ、鬼塚古墳や浜木綿の群生地など、島の自慢の場所にも触れながら約8キロの道のりを巡り、海の幸でバーベキューを楽しみます。

今も昔も変わらない家族や妻、恋人への思いが伝えられる万葉の歌碑は島の誇りになっています。

しているだろう。庭のハギやススキも散つてしまつただろう」という故郷への思いが込められています。「あしひきの 山飛びこゆる 雁がねは 都に行かば妹に逢いて来ね」など妻や恋人への切ない思いを歌ったものもあります。



左／神事を授かる祈願者  
中上／神事に海上安全をいのる  
中下／お供え物は海の幸のヒジキ  
右／海中に鳥居が立つ住吉神社を海から眺める



# 大地と海の恵みは これからも島の暮らしを支える



左上／石割り豆腐づくりに励む島の女性たち  
右上／かつて石割豆腐は今以上に固く、縄ひもで縛って運んだという  
下／ヒジキの天日干しは海岸で見かける島の風景

## 大陸から伝わった 石割豆腐

万葉の時代から韓国と神集島の交流をうかがわせるのに島に残る言葉があります。親友のことを見た韓国語で「チング」と言いますが、島でも親友を「チング」と呼んでいました。そんな大陸との深い交流は食にもあります。それが「石割豆腐」です。

冠婚葬祭、盆、正月には欠かせない石割豆腐は、大陸から作の方が伝わり、島の家庭の味として代々伝わってきました。

石割豆腐は、半生の大豆と海水から作る天然のにぎりを使い、重石で十分に水分を切るのが特長です。やわらかさの代名詞「豆腐」ですが、「石割豆腐」は名前の由来どおり、豆腐を落としても石の方が割れてしまふ、と例えられるくらいに硬く、弾力性に富んでいます。江戸時代、石割豆腐を近所におすそ分けするときに、わらで組んだひ

もで十文字に縛つて子どもたちに持たせていたといいます。最近は漁協婦人部が島おこしのために製造販売し、島外の人の手に入るようになりました。

## 島の信仰の熱さ を物語る野仏信仰

島内には、「島の人口を超える」と例えられるくらい道端や野に多くの石仏が見られます。

お大師さん(弘法大師)信仰が根強く残るこの島には「靈場八十八カ所」があり、お大師さんのはか薬師如来などの石仏がまつられています。三月の第一日曜日には、島外からもお巡りする人々が訪れ、島では座(当番のグルーブ)が食事を作ってご接待します。

また、その昔、神々が集う場所といわれていた「とやの原」には戦争などで自分の身内が亡

くなつたときに神々のそばで魂を慰めたいと、小さな岩を台座に石仏を置き、毎月十八日には、これらをお参りする野仏参りが続いています。



左／信仰熱い島には多くの石仏  
右／神々が宿る「とやの原」に立つ野仏



毎月18日に漁師たちがお参りの際にお供えする



# 島

点描 神集島



- 1.とやの原の万葉歌碑 2.港のそばの海水浴場  
 3.防波堤の灯台より夕日を眺める 4.海に向かって  
 幾重にも連なり、航海の安全を願う住吉神社の鳥居  
 5.港で人々を見守る恵比須さま 6.浜木綿(はまゆ  
 う) 7.島の唯一のお店「神集島購買部」 8.アロエ  
 の花にとまる小鳥 9.定置網の手入れをする乗組員 10.鯨の  
 上に恵比須が乗る珍しい「鯨恵比須」 11.手に鰐を持つ鰐大  
 師 12.お参りは家族の触れ合いの時間である
- |    |    |    |
|----|----|----|
| 1  | 2  |    |
| 4  | 5  | 6  |
| 7  | 8  | 9  |
| 10 | 11 | 12 |

## 島 \* とびっくす

神集島の大立者「岩本三吉」氏の石碑

**岩本三吉氏**



大正末期、底引き網の1種で大敷網に日本で初めて取り組み、漁業振興に寄与しました。漁村の暮らし向きが楽になるように、収入が増えるようにと、このやり方を無償で島民や近県の漁師に紹介した人物です。その功績を称えて島内に碑が立っています。

末永い幸せ願って女性の厄払い  
のべだご



神集島では33歳の女性の厄年に、厄払いをするため「のべだご」を作る風習があります。のべだごは小麦の粉(現在は3割ほど米の粉を混ぜる)を水で溶いて捏ね、出来るだけ長く幅広く伸ばして鍋で茹で、末長く健康で幸せに暮らせるようにと願いを込めて、床の間に飾ります。その後は小豆あんを作つて混せて、あすそ分けとして配り、食べて頂いて厄を祓います。